

米山
中
学
校
区



米山縁起

和銅五年泰澄禪師、越前の国から来て、この山（当時五輪山という）で授行中ここより鉄鉢を飛ばして食を乞われていた。

時に出羽の国の住人で上部（かんべ）の清定が上米を積んでこの沖を通られた時、禪師は鉄鉢を飛ばして供米を乞われた。清定はこれを拒否するや船中の米一俵も余さず、雁のように相連なって五輪山に飛んで来た。清定は恐れて許しを乞うた。この時から五輪山を米山と呼ぶようになった。

永正六年源義家が奥州の安部の貞任を討つとき、この山に祈願して願いがかなったのでお礼に寺を建てて自分の守り本尊御戸薬師をおまつりした。これが今の本尊仏と言われている。

米山のいわれ

その昔、今の米山が「五輪山」といわれたころのことである。その米山に泰澄という坊さんが住んでいた。泰澄を慕って能登から一人の沙弥（修業僧）が来て、泰澄と共に住み、よく仕えて影の形に添うようにしていた。この沙弥時々、鉄鉢を飛ばして海上を通る船から食う米を買っていた。ある日一雙の米を積んだ船の通るのを見て、いつものように米をくれと頼んだ。ところが船主清定は「この米は公（おかみ）へ差し上げるもので一粒たりともやるわけにいか

ない。」と断わった。すると不思議なことに船に積んであった米俵が雁の飛ぶように空を飛んで米山の頂上に積み重ねられた。この有様に清定は驚いて山に登り泰澄に「この米をなくしては死罪になるので、ぜひとも返してくれ」と頼んだ。泰澄がいうには「おれは知らん、おそらくはふもとの沙弥のしわざであろう。行って頼むがよい」と、清定は山を下り沙弥のいる所に行き深くわびた。（この沙弥は常には海の岬におり鉢を乞（こ）うていた。このところを鉢崎といい、岬になったところを聖ヶ鼻という）沙弥がいうには「おまえはわずかな供養（くよう）を惜んだのでこらしめたのだ。早く船に帰りなさい米は返してやる」といった。すると不思議なことに、山の頂上の米俵はまた鳥の飛ぶように船中に飛んでかえった。それ以来、五輪山を人々は米山と呼ぶようになったという。

付記

。現在の米山町は柏崎市と合併するまで鉢崎といていた。この鉢崎の地名は米山の沙弥が鉄鉢を持って米を乞うたところで、海岸の部落であったので鉢崎と名付けたという。

。沙弥が鉄鉢をもって航行の舟から米を乞うためにいたところ、鉢崎（現米山町）地内の一部が聖ヶ鼻（ひじりがはな）という。

米山の鯉形

五月になると柏崎地方では「木の芽風」といって強い風が吹くと米山の雪が消えはじめる。その年の雪の降りぐあい、消えぐあいで

雪消えのあとが黒く鯉の形に見えたり、百姓がすじをまく形に見えたり、火の字の形に見えたりする。

土地の人が鯉のしっぽが大きく見える年は大漁であるとか鱸がたくさんとれるとかいいます。

すじをまく百姓が見えはじめると「そら、すじまきの時季になつたぞ」と言い、はっきり見えると豊年だと喜びます。

火の字の形が見えると「火事があるから火の用心しよう」といつて互にいましめあいます。

米山の六夜さん

「六夜さんの月待ち」は諸国にある風習であるが、柏崎では米山の六夜さんは有名である。

二十六日の夜、柏崎では米山に登る人が多く、この夜の月には阿弥陀（あみだ）さんが見えるといつて、御詠歌（ごえいか）をととなえ、踊りなど踊つて、三つに見えるという月を待つ風習がある。

三尊（さんぞん）さんのおのぼり見たいなら

米山さんへ 六夜さんの時にのぼれ

六夜さんの朝日は太陽が三つに見えるといつている。

「山越しのあみだ如来」

「みだ三尊の御来迎」

などといつて米山の頂上に徹夜して、日の出をおがむともいわれれている。

米山地名考

大清水 泰澄禪師がこの山上に寺を建立せんとし、祈願して水を得たと伝う。

駒返り 関所手形のない人は、ここから引返すか、間道を抜けて通つたところ

聖が鼻 泰澄禪師が居住されたとも、臥行沙弥が居住したとも言う胞姫神社 義経の北の方が出産され、その胞衣を納めた所に立てた社という。

芭蕉が丘 松尾芭蕉が、會良を伴つて奥州からの帰途立より、その景色を賞でた丘という。

人切沢 戊辰の役古戦場跡といわれる。

大清水（地名）

持統天皇の勅願（ちよくがん）によつて、越後に下つた泰澄禪師はここ大清水を選定され、お寺を建てることになり着工されたが、なにしろ山の頂上ので水がなく困られた、そこで自ら一刀三礼刻まれた千手観音菩薩（ぼさつ）に三、七日の祈願をこめられ、「どうぞこの山に水をお与え下さい」と一心にお祈りされた。

そして満願の二十一日目の朝、不思議にもお堂の真下とその他三ヶ所から、こんこんと水がわき出た。これこそ観音のみたらせと三

泉にそれぞれ、功德水（くどく）清浄水（しょうじょう）阿伽水（あか）と名づけられ地名を大清水、寺号を大泉寺と名づけられたという。

現在お堂の下に、こんこんと四季変わることはない清水を功德水と呼んでいる。

身代り観音

土御門（つちみかど）天皇の時代、鳥坂（とっさか）の城主、城資長（じょうのすけなが）の家来に淵田源内（ふちだげんない）という者があった。ある時あやまって資長のだいな家来を殺してしまった。資長は大変おこって源内の首をはねようとした。源内は自分が正しく、身を守るために殺したのだといって、一時身をかくそうと思ひ、ひそかに城内を逃げ去り、ついに大清水観音堂まで逃げて、仏様に助けを求めると、お願いして床下に身をかくした。しかし大ぜいの追手のため、とうとう生けどりにされ、堂の前で首をはねられてしまった。

その首を城に持ち帰り城主が首実検をしたところ、これは不思議、源内の首だと思っていたのに、その首は顔かたちにこやかな観音さまの御首であった。観音さんのお慈悲が源内の首に代ったのであった。資長は大変驚いて、自ら大清水に御首をお送りして、深く考えのまちがっていたことを悔い、その罪をおわびして、供料を寄進した。

それ以来、大清水観音を身代り観音というようになった。

稲刈り仁王

昔、柿崎在の川井という村に能登屋という家があって主人は大変信心深い人で、ことに大清水の観音様の熱心な信者で毎月八日にはかかさずお参りして、ろうそくやお花などをあげたり、お堂の内から外まできれいにこそうじしておりました。

その年は大そう天候もよく稲は近年にない豊作で、「この分だと去年の二倍もとれるだろう。これも神様や仏様のおかげだ」と能登屋の主人は喜んでいましたが、稲刈り近くになって、能登屋の家ではおかみさんが熱病にかかり、続いておすこ夫婦も熱病にかかり三人も病気にかかって寝てしまったので主人は困り果てていました。そんなある朝まだ暗いうちに二人の大男が訪ねてきて「おれたちは大清水の観音堂の仁王で、観音様がお前様が病人で困っているから稲刈りの手伝をして来いと言われたので来たんだ」といって、能登屋の田で稲架場をつくり、せっせと稲刈りを始めました。

おれたちは木像だからと言って、ご飯もたべず三日三晩ですっかり稲刈りをすませました。能登屋の主人が喜び、何かお礼をしたいとたって言うので仁王たちは相談し合って、それでは、かつがれる程の稲をくれと言って太い、長い荷縄で稲をたくさんかついで帰って行きました。

仁王たちは帰り道に、主人が病気で困っている家、お母さんが一人で小さい子どもが八人もいる貧しい家とか困っている家の入口にこっそりと十束（そく）二十束と置いて、大清水の観音様のところ

へ帰った時は背の稲はなくなっていました。

観音様のおみやげにと稲をもらってきたのに一把もなくなくなり、おそれるおそれ、事の次第をお話したところ、観音様は怒るところか
にこにこして、お前たちは本当によいことをしたとほめられたそう
だ。

大清水の竜燈杉（りゆうとうすぎ）

大清水観音さまの境内に大きな杉の大木がある。夜になると観音
さまが海から竜を招いて、この大杉の頂上に燈（あかり）をとぼし
海上を行く舟の安全をはかられたという話が伝えられている。

地蔵が鼻の地蔵

米山町は昔八崎といわれ海中にたくさんの岬が突出していた。

柿崎から来て第一の岬が一番難所で嵐の時は通行が出来ず、たく
さんの旅人が荒波にのまれて命を失った。このため信心厚い人がそ
の岬に地蔵尊をまつり一つには死んだ旅人をとむらい、一つには交
通安全を祈った。地蔵尊がまつられたので、いつかこの崎を地蔵崎
地蔵が鼻とも呼び地名も地蔵と呼ぶようになった。

明治二十九年北越鉄道敷設工事が始まったとき一土工がしかけた
ダイナマイトが爆発して地蔵尊が四散した。ダイナマイトをしかけ
た土工はその時、足腰がたたぬいざりになった。工事監督はこれは

地蔵尊の神罰と思ひ蓮光院の住職を頼んで地蔵尊を供養した。その
時住職の夢の中に地蔵尊があらわれて「わが首を拾ってあつくまつ
れ」とお告げがあったので、そのことを工事監督に申された。監督
らが探し廻るとみじんになった岩の間に地蔵尊の首が見つかったの
で、補修して新しいお堂を建てこれをおまつりしたのが今の地蔵の
地蔵尊である。

家伝薬「あいす」

昔、鉢崎の漁師が海岸で網をひいていたところ網に河童がかかっ
て引き上げられた。漁師たちは日ごろ少年たちが海で溺死するのは
河童が少年の尻の肉を食うせいだと思っていたので、この時とばか
りに河童を心ゆくまでうち据えた。河童は涙をたらして、「助けて
くれ、助けてくれ」と泣き叫んでいた時、網元が来て、「河童は水
神様だ、手荒な事をするな」と漁師たちをいまして助けてやった。
助けてもらった河童は「助けてもらった札に、あいすの製法を教え
ましょう」と網元に打身、筋ちがい、捻坐のこうやく「あいす」の
作り方を教えた。網元の家では家伝の秘薬として伝え、同病に苦し
むものに分け与えたという。

海中から現われた開運地蔵

昔、文化のころといわれている。米山町の蓮光院の住職浄恵上人

の夢の中に、けたかい地藏尊が現れて、

「我をまつれ、この寺の運も開けるだろうし、私を信心する者たちの運もまた開けるであろう」

とお告げになった。浄恵上人は気にかげながらもこの地藏様がどこにいられますのやらわからないまま数日むなしくたってしまった。

ところが十一月二十七日、この日は殊の外大荒れで雪まじりの風と丈をなす白波が沖の大岩をゆり動かす様な大あらしであった。浄恵上人が本堂からふと海上を見ると一箇所煌々（こうこう）と光り輝いて、その光芒の中にさきに夢にみた開運地藏が姿を現わしている。その有難さに思わず伏し拝んだ。やがて光が消え地藏の姿も消えてしまったが、上人は村の漁師に頼んで荒海に舟を出し光ったと思われる場所を光ったと思われる場所を探しまわると波間に首だけの地藏さんが漂っていた。

「荒波にもまれて胴体を失なわれてしまわれたらしい おいたわしや」

と拾いあげ、これを修復しておまつりしたのが今の開運地藏である。蓮光院はその後、地震につぶれたり、火事に焼けたりしましたがこの開運地藏さんだけは無事で災難にあうたびにお寺はますます盛んになっていきました。

聖が鼻（ひじりがはな）

泰澄上人は（紀元六八八—七六二年）越前の国から越後の国へ来られ、八崎のたくさんの崎の中で一番高い岬の上に住まわれて修行

された。食べ物が欲しくなるとここから鉢の子を飛ばして沖を通る船から食物を寄進してもらってそれを食べて修行された。

沖を通る船はこの辺を鉄鉢が来るところから八崎と書かずに鉢崎と書く様になったと伝えられている。土地の人はいつしか泰澄上人のいられる崎を聖が鼻と呼ぶようになった。

やがて泰澄上人は米山に登りそこで修行されるようになり上人のいた堂は聖行山蓮光院と名づけられたという。

蓮光院は天明地震の時倒壊し、その後聖が鼻の崖下に建てかえたが大正九年鉢崎の大火で焼失し、その後岡の上（現在地）に建てられた。

鉢崎の地名考

八崎は、米山町から鯨波に至る三里の間の総称 米山の北麓で昔は木芽峠と言った。俗に米山腰三里の峽岨で 昔八つの岬があったから 八崎と名づけられたという。

又言う 昔鯨が獲れた事があった。腹の中から大小の鉄鉢数個でたので鉢崎という。

又鉢われ岩などの岩もあったという。

又言う 聖が峰に聖者がいて、そこより幻術を以て 海上を航行する舟に鉄鉢をとばして 布施を乞うたので、ここを鉢崎と言ったという。

かめわり坂
うぶゆの井戸
よなひめ神社

上輪地内に「かめわり坂」という地名がある。上れば見渡し広く、平な所に茶店があつて、義経公の記念といつて「力餅」を売つてゐる。

道から五十間（九〇メートル）へだてた水田の中に「産水（うぶみず）」といつて水がわき出ている所がある。義経の北の方でこゝで出産した時、弁慶がこの水で産湯（うぶゆ）をつかわしたという。近年高田の城主榊原家から石の井筒と「産所の跡」という石碑をおくられた。

向いの山林の中に胞姫権現という社がある。

産水の水が流れてきて、白糸の滝となる。

この村人は出産の時まめめしく仕えたので、公からいろいろの賜り物（たまわりもの）をもらい今でも大事にしまつておく家がある。

この村の女人はみごもつても五月帯（いわたおび）をしないが難産の心配はないと言ひ伝えられている。

おべんの滝
おべんの松

佐渡の乙女、お弁というものが柏崎の男を恋して夜な夜な番神岬

の常夜燈を目当てに大きなたらいに乗つて通つてきた。男はある夜、その目当ての常夜燈を吹き消してしまった。目標を失つた女は海上をただよつてゐるうちに暴風にあい、たらいは転覆（てんぷく）してお弁は死体となつて滝のもとに打ちあげられた。それからその滝をお弁の滝という。

おべんの松

右記お弁の死体をほうむつて、その上に供養（くよう）のため植えた松をお弁の松という。

